

前回、わたしたちの罪は〈自己中心性＝エゴイズム〉がもたらすものであり、人間としての成長はそこから抜け出すことにあると書きました。きょうから再び『わたしが・棄てた・女』に戻り、ミツにささやく〈ある声〉について考えていこうと思います。

『手の首のアザ (一)』(p.71~93)

ミツが働く皮膚病の薬と石鹼をつくる工場は、親友のヨッチちゃんと4人の男子作業員だけの小さな会社です。ミツは夜勤料(1回100円)をかせぐために、通常の勤務を終えたあと、週5日夜遅くまで働きます。なぜかという、商店街の用品店で雑誌『明るい星』の中で見た『高峰秀子や杉葉子のような女優が着ているような』黄色いカーディガンが欲しかったのです。もちろん、吉岡との次のデートに着ていくつもりです。そして、破れた靴下をさかさに履いていた吉岡のために男物の靴下も買ったかったのです。『三足の靴下を彼にわたせばどんなに悦ぶかしら。』と、昼間の仕事の疲れもわすれて働くミツ。

しかし、先輩の作業員・田口さんは工場の番人をおかねて家族と一緒に同じ敷地に住んでいたもので、なかなか帰らないミツに『8時以降は工場に残っては、いけないんだぜ』と長い説教をしたり、ミツやヨッチちゃんにはきびしくあたっていました。『大嫌い。田口さんなんか。』とミツは思っていました。ヨッチちゃんも同じです。田口さんは『二人にはこと更に意地悪をする。男子工員たちと彼女たちの体のことを聞えよがしに批評しあい、イヤらしい笑声をたて』ることがあるのです。

ミツにとってあまり楽しい職場ではありませんでしたが、ふるさとの川越には帰ろうとは思いませんでした。自分がいないほうが、父親も義理の母親もうまくいくことを知っていたからです。『自分の存在が新しい母親の倅せをさまたげること、幼い頃から彼女は子供心に感じていた』のです。『ミツは自分がいるために、よその人が気の毒な思いをするのに耐えられない』女性であり、『不幸になるのをみると、たまらなく悲しい気持ちになる』ので、東京で働きながらひとりで生きる人生を選んだのでした。

吉岡に会ってから2週間が過ぎたのに、なんの連絡もありません。はがきか手紙を『胸をドキドキさせ』ながら待つミツ。『胸にぶらさげたお守りを握りしめて自分に言いかけせる。(きつときつと明日くるもん……明日くるもん)』。仕事帰りに洋品店のショーウィンドーをのぞいて、『(ああ、よかった。まだ売れていないわ。)]と黄色いカーディガンをみつめる』ミツ。

みなさんも青春時代のひとコマ、似たような日々を送ったことはありませんか？ わたしですか？ あります、アリマス。毎回、便箋10枚の手紙を書いたことがあります。ふつうのシャレた便箋で10枚だと切手代が余計にかかるので、航空使用のうすい便箋で書きました。手紙を出してもすぐ返事が来るはずはないとわかっている、翌日から下宿に帰ると真っ先に郵便受けをのぞき込み、ないとわかると、「オレの部屋におばさんが置いてくれたのかもしれない…」と、心拍数を最大にして部屋に駆け込んだものです。

返事があった日は受験勉強どころの話ではありません。また便箋 10 枚の手紙書きです。10 枚も何を書いたのか忘れましたが、よくもまあ書けたものです。でも、いちばん書きたかったこと — 「好きです」という文字は、とうとう書けませんでした。日本語では照れくさかったので、燃えるような恋心をドイツ語に託して書きました。“Der Zirkel meines Lebens dreht sich mitten um Dich.” 日本語は自分で考え、先輩に教えてもらったドイツ語で気持ちを伝えようと思いました。えっ、「日本語訳は？」ですって？ま、エエでしょ。この塾の「むずかしいことを やさしく」というモットーに反して申しわけありませんが、これをお読みの顔見知りの方にお会いすると何を言われるかわかりませんので、書けません。書店で『独和辞典』をタダ読みして調べてください。彼女からの返事は 2 枚程度（あるいは葉書 1 枚！）。この温度差 … 。結果はご想像のとおりです。メールなどなかった日々は、道端にひっそり咲く小さな花のような思い出をつくってくれました。（ドイツ語初心者のカノジョ、意味わからなかったん、ちやうやろな … ）

話を戻します。

◇「くたびれた顔」のささやき

いよいよお給料日。月給プラス 1000 円が入った給料袋をもらいます。ミツは寒い風の中、買い物に出かけようとするので工場の門のそばで、田口さんと背中に赤ん坊を背負い、7~8 歳の子どもの手を引いた奥さんが口論をしているのを耳にします。田口さんが工場に戻った後、ミツは風が吹きつける道にまだ立っている母子に会います。話を聞くと、田口さんは給料の半分を花札や酒に使ってしまい、あした男の子の給食費を 3 ヶ月分払わなければならないというのです。ランドセルだって買ってやっていないといいます。

『そう、大変ですねえ。』『じゃ、行ってきますね。』と歩き出したミツ。そのとき — 。少し長くなりますが、とても重要な箇所なのですべて引用します。

『風がミツの心を吹きぬける。それはミツではない別の声を運んでくる。赤坊の泣声。駄々をこねる男の子。それを叱る母の声。吉岡さんと行った渋谷の旅館、湿った布団、坂道をだるそうに登る女。雨。それらの人間の人生を悲しそうにじっと眺めている一つのくたびれた顔がミツに囁くのだ。』

（ねえ、引きかえしてくれないか …… お前が持っているそのお金が、あの子と母親とを助けるんだよ。）

（でも。）とミツは一生懸命、その声に抗（あがら）う。（でも、あたしは毎晩、働いたんだもん。一生懸命、働いたんだもん。）

（わかっているよ。）と悲しそうに言う。（わかっている。わたしはお前がどんなにカーディガンがほしいか、どんなに働いたかもみんな知ってるよ。だからそのお前にたのむのだ。カーディガンのかわりに、あの子と母親とにお前は千円をつかってくれるようにたのむのだよ。）（イヤだなァ。だってこれは田口さんの責任でしょ。）（責任なんかより、もっと大切なことがあるよ。この人生で必要なのはお前の悲しみを他人の悲しみに結びあわすことなのだ。そして私の十字架はそのためにある。）』

ミツは悩みます。葛藤します。夜勤をしてまでかせいだお金。自分と吉岡のために遣

おうと決めていたお金。自分とは〈別の声〉はそのお金を、あの〈大嫌い〉な田口さんの奥さんと子どもたちのために差し出せという…。さあ、ミツはどうするのでしょうか。次回まで。

【引用した書籍】 ・遠藤周作 『わたしが・棄てた・女』